中野香織
「ファッション歳時記」
132

幸福度世界一の秘密

富山県の新田知事はじめ関係者の方々から、富山が目指す「ウェルビーイング」についてお話を聞く機会がありました。理想的なあり方を伺いながら、そこに近いと思える具体例として、フィンランドのことを連想しました。フィンランドは人口550万人と小さな国ですが、幸福度において5年連続世界一です。ジェンダーギャップもなく、現在の首相サンナ・マリン氏はじめ連立5政党の党首はすべて女性です。ヘルスケアや教育の水準も高いことで知られます。その幸福の源泉はいったいどこにあるのかを知りたくて、フィンランド大使館の商務官ラウラ・コピロウ氏にインタビューしたことがあります。ウェルビーイングのヒントになるかどうかわかりませんが、印象に残っていることを共有します。

まず、フィンランド人は「美しい毎日」を重視しているということ。

毎日の生活体験の積み重ねこそ重要と考えているので、水を飲むグラス、肌に触れるタオルこそ上質なものを使うそうです。一点豪華のために日々を我慢しない。この考え方にのっとり、小学校で使う机や椅子にも高品質なものが使われています。日々、美しいものに囲まれることが根本的な幸福感につながると考えるのです。結局、そうしたものは長く使えて日割り計算すると「お得」です。

では「日々の幸せ」をベースにしたデザインの特徴は何かというと、素材の使い方が合理的で統一感があることに加えて、文字がほぼない、ということ。ブランド名を大書するフィンランド製品はないし、注意書きもあまり見ません。フィンランドのサウナにも、文字がほとんどないそうです。書かなくても分かるだろうという信頼があるし、分からなければ聞けばいい、という考え方です。聞くこと、教えることによってコミュニケーションが生まれます。そこまで含めての「デザイン」なのですね。

ファッションも当然のように、サステナビリティが大前提になっており、情報の透明化も進んでいるので、環境に配慮しない企業はすぐにメディアやSNSで話題となって支持を得られなくなる仕組みです。

そんなこんなの「先進的」に見えるけれど実は大昔から存在する考え方の根底には、自然との共存が幸せにつながるという哲学があります。自然と共に生きる人間はみんな一緒という考え方から、ジェンダー平等も当たり前のように生まれています。家庭においても、誰が何をするかはジェンダーで決まるわけではなく、適性で自然に決まるそうです。

そんなふうにごく自然なので、30代の女性首相や党首たちも、ことさら「女性」をアピールするような原色スーツも真っ白スーツも着ないのですね。着る必要もないのでしょう。

ジェンダー平等や多様性の尊重は、肩肘張って「達成」を目指すよりもむしろ、お役所的な達成目標意識そのものから脱却したほうが早く「到達」できるのかもしれませんね。自然と共存する「みんな一緒」の生き物という本来の在り方に立ち返ってみる。結果、それぞれの適性が活かされ、コミュニケーションも生まれ、日々を美しく幸福に暮らすことを工夫していける。そんなシンプルなことなのだ、とフィンランドの例は教えてくれます。

1881年にフィンランドのガラス製品製造メーカーとして創業した「イッタラ」のテーブルウェア。イッタラ表参道店にて

なかのかおり
1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、『「イノベーター」で読むアパレル全史』(日本実業出版社)、ほか多数。最新刊は共著『新・ラグジュアリー　文化が生み出す経済 10の講義』(クロスメディア・パブリッシング)。